

VI 国際交流

公民館で育む国際交流

～ハートフルスピーチコンテストを通して～

柳川市教育委員会教育部生涯学習課 大和公民館担当係長 荒木和久

◇事業名 国際交流の集い
「ハートフルスピーチコンテスト」

◇事業内容 外国人は日本語で、日本人は英語で話すスピーチコンテストの開催



第16回大会(平成20年12月)の出場者

◇事業の目的 地域における異文化理解の土壌づくり、国際感覚を持った人づくり

◇実施主体 国際交流の集い実行委員会 ◇事業予算 310,423円(平成20年度)

◇事業の特徴

- (1) 地域住民の自主活動から生まれたものを住民と公民館が連携して育て上げた。
- (2) 外国人と接する機会がまれな「小さな町」(旧郡部)で16年間継続されてきた。
- (3) 「小さな町」にありながら、異なる文化や習慣、考え方、言語に接する貴重な機会として一定の成果を挙げてきた。一方で、課題にも直面している。

◇地域の概要：柳川市南部(旧山門郡大和町)。有明海に面し、大部分が干拓地。合併前の旧大和町の人口は約18000人(高齢化率約20%)。基幹産業は海苔養殖を中心とする水産業と農業 ▶外国人と接する機会が極めて乏しい地域だった。

※旧大和町は平成17年に旧柳川市、旧三橋町と合併した。合併後の名称は「柳川市」

◇事業の経緯

(1) 発端：町の人材育成事業の一環となる「外国青年招致事業」で平成3年度、国際交流員が来町した。初代は22歳のフランス人女性

(2) 国際交流員のジレンマ

- ・「ガイジン」と住民から好奇の目を浴びる「私は見世物じゃない」。習慣、発想の違いに対する戸惑い、自分の考えをはっきり言わない日本人へのいら立ち一など

(3) 国際交流員を迎え入れた住民たちのジレンマ

- ・自立心と自己主張の強さに圧倒される。「郷に入っては郷に従え」という概念が通じない。カルチャーショックの連続。互いに理解しあえないもどかしさが募る。

▶地域の課題として異文化理解の土壌づくりが必要だった。その足掛かりとして風俗、習慣、考え方の違いなどをテーマに意見交換する場をつくることから始めた。

(4) スピーチコンテストの開催へ

- ・やがて国際交流員を囲む住民グループが誕生し、意見交換や討論の場になった。

- ・ 2代目国際交流員（米国人男性 30 歳）が「国際交流は異なる文化や考え方に耳を傾けることから始まる。今の意見交換を発展させて弁論大会を開いては」と提案。
- ・ その案を具体化するため 5 つの住民グループが連携し平成 4 年に初のコンテストを大和公民館で開催。資金は住民グループが地元事業所などから協賛金を募った。
- ・ コンテストの開催を契機に連携した住民グループは「国際交流の集い実行委員会」の名称でまとめ、毎年スピーチコンテストを主催する団体に成長した。

◇スピーチコンテストの内容

- (1) 構成は①スピーチ②審査③アトラクション（日本や外国の伝統芸能などを披露）④表彰⑤国際交流パーティー（住民や出場者が幅広く立食形式で交流）など。
- (2) スピーチの内容を和訳した冊子を配るため、英語が分からない人でも楽しめる。
- (3) スピーチの内容は異なる生活習慣や価値観に接した驚き、ジレンマ、文化交流、相互理解についての問題提起、提言など。
- (4) 昨年末の第 16 回大会までに外国人は 26 か国から 128 人、日本人は 146 人が出場。年齢層は小学 3 年生～70 歳代と幅広い。



出場者は小学生から
70 歳代まで計 274 人

■公民館事業との連携

- ◎大和公民館内に事務所を置く教育委員会社会教育課（当時）はスピーチコンテストを町ぐるみの国際交流・人材育成事業と位置づけ、同実行委員会と連携を図った。
 - (1) 第 8 回大会から補助金（年額 18 万～20 万円）を交付するようになった。実行委員による協賛金集めが不要になり、資金面での負担が飛躍的に軽減された。
 - (2) 大和公民館が実行委員会の事務局になり、事業の信頼性を高めるとともに、事務を補助した。
 - (3) 大和公民館に常駐していた国際交流員が司会者として大会のホスト役になった。
 - ▶ これらにより、大和公民館は本事業の明確な拠点になった。

■事業の成果

◇来場者へのアンケート調査からの分析

- (1) スピーチの内容についての評価～第 16 回大会（20 年度・三択式）の調査結果～
 - ・ 「よかった」83.3%、「ふつう」11.1%、「つまらなかった」0%、「記入なし」5.6%
- (2) コンテストについての提言・感想（記述式）～主な声を抜粋すると～
 - ・ 田舎の公民館でこれほど国際的な催しが長年にわたり開かれていることに驚いた。
 - ・ 小さな町で多様な文化や考え方に触れる貴重な機会になっている。
 - ・ 外国人を身近に感じた。外国人から見た日本社会の在り方が新鮮に映った。
 - ・ 私も外国語を話せるようになりたい。来年は出場したいと思った。
 - ・ 出場者の国籍や文化的背景、年齢層、着眼点などが多彩で楽しめた。
 - ・ 自分たち留学生を応援してくれる日本人が数多くいることを知り、心強く思った。
 - ・ 学習中の英語で自分の意見を主張するよい機会になった。
 - ・ 言葉や習慣が違ってこれらの壁を乗り越え、理解しあうことが大切だと思った。

- ◎選択式、記述式いずれもおおむね高い評価を得ている。特に記述式の回答からは地域の課題だった「異文化理解の土壌づくり」、その延長線上にある「国際感覚をもつ

た人づくり」という観点から着実に成果が表れている ▶ 本事業の成果は公民館活動（生涯学習事業）が目指す「人材育成」や「国際交流の推進」と方向性が一致する。

◇地域の国際交流活動の核に

(1) 地域への貢献や国際交流推進などの功績が認められ、「国際交流の集い実行委員会」として3回の表彰歴＝平成12年度・日本善行会善行表彰、14年度・大和町制施行50周年町政功労表彰、17年度・大和町閉町記念式典行政功労表彰



多彩な来場者が集う
国際交流パーティー

(2) コンテストがきっかけで異文化に興味を持ち、外国語習得や留学を志したとの声も多い。教育委員会が実施していた「中高校生海外研修派遣事業」の体験発表や留学先で習得した外国語の実践発表の場として活用する例もみられる ▶ 生涯学習事業との相乗効果を生んでいる。

(3) 実行委員会の結成で住民間の情報交換が活発になり、実行委員などを中心とする様々なボランティア団体（福祉の会、読み聞かせの会、女性交流学習の会など）や外国語講座が生まれた ▶ 住民の自主的な学習意欲を引き出すきっかけに。

(4) スピーチコンテストが縁で、この16年間に6組の国際結婚がみられた。

■今後の課題 ①来場者の伸び悩み②実行委員の世代交代の停滞③発想や運営のマンネリ化—の3つがからみあい、行き詰まりを感じている。

◇来場者の伸び悩み

(1) 500人収容の大和公民館大ホールに聴衆は毎年200人前後。アンケートの回答にみられる提言や感想では「内容の充実したスピーチコンテストなのに観客が少ないのが残念」「もっとPRに努めるべきだ」などの声が大半を占める。

(2) PRの現状：広報紙への掲載、全行政区にポスターを掲示、招待券の配布、中学校・語学学校・大学への訪問など ▶ 大幅な集客増にはつながっていない。

◇実行委員の世代交代の停滞

(1) 実行委員会の発足から16年が経過し、職場や家庭での責任が増したことで委員が皆、多忙になった ▶ 活動が負担になってきた。次世代への継承も難航。

(2) 発足時からの委員が次第に減り、若い人の加入は少ない ▶ 委員が高齢化。

(3) アンケートでは「よい催しだ」「大変だろうが、頑張れ」「続けてほしい」などの激励が多く寄せられる。一方、新委員の勧誘活動に対する反応は極めて鈍い。

◇発想や運営のマンネリ化

(1) 現状は悪循環：委員の世代交代の停滞⇒新しい発想が生まれにくい⇒構成のマンネリ化⇒来場者の伸び悩み⇒新委員加入の魅力に乏しい ▶ 発想の刷新が必要。

(2) 交流の在り方：国際交流を目的に始めたが、運営に追われて交流がおろそかになっている面も。現在、今後の在り方を模索している《例：コーディネーターを囲むディスカッション方式（交流中心）へのシフトなど様々な案を検討中》

■問い合わせ先

〒839-0252 柳川市大和町栄231番地 柳川市立大和公民館 荒木和久

電話 0944-76-1111 内線 412 FAX0944-75-7550